

研究報告

音叢による音楽 — 今史朗《偏光》におけるクラスター技法  
MUSIC FOR TONE PLEXUS:  
CLUSTER CHORDS IN “POLARIZATION” BY SHIRO KON

中村 滋延

Shigenobu NAKAMURA

九州大学大学院芸術工学研究院

Faculty of Design, KYUSHU UNIVERSITY

概要

今史朗は1972年に《弦の音叢による偏光》を弦楽合奏とヴィブラフォンのために作曲した。この作品はいわゆる音群的音楽様式による作品である。彼は音群を音叢と名付けた。そうすることで他の作曲家の音群的音楽との差別を意識したのである。この作品に見られる音叢による音楽の特徴は以下の通りである：(1) 四分音クラスターは用いられず、代わりに全音クラスターが半音クラスターとともに用いられている；(2) 音群的音楽様式にはめずらしく、拍節リズム構造がある；(3) ミニマルミュージックのように単純な音型反復がある。

In 1972, Shiro Kon composed “Polarization for Plexus of Strings,” which takes the style of a “textural composition,” for strings and vibraphone. Kon referred to the sound mass as the “tone plexus.” The tone plexus characterizes the textural composition of Shiro Kon, which can be described as follows: (1) Instead of using quarter-tone clusters, a combination of whole-tone and semitone clusters is used; (2) the metrical rhythmic structure, which is not commonly found in other textural compositions, is employed in the work; and (3) the work incorporates the elements characteristic of minimal music, which involves the simple reiteration of small units such as figures, motifs, and cells.

1. はじめに

本発表の目的は、今史朗<sup>1</sup>（コン・シロウ、1904～1977）が1972年に作曲した《弦の音叢による偏光》（以下、《偏

<sup>1</sup> 今史朗についてのまとまった資料は現時点では、中村滋延『作曲家・今史朗の音楽創作史研究——忘れられた作曲への再評価の試み』Vol.1,（私家版）2013しかない。それと同じ内容が下記のサイトにアップロードされている。http://kon.nkmrsgnb.info/

光》)の作品分析を通して、今史朗の音群的音楽<sup>2</sup>の特徴の一端を示すことである。その際、今史朗がタイトルの中で使用した「音叢」という言葉に焦点をあてる。

今史朗は自身の音群的音楽の様式を示す複数の作品のタイトルに「音叢」という言葉を用いている。《偏光》以外に、1967年作曲の《弦の音叢による三つの短詩》、同じく1967年の《弦の音叢を背景とする金属音のひびき》がそれである。《偏光》は今史朗の音叢様式の最後を飾る作品であり、音群的音楽としての今史朗の独自性が見られる。

作曲者である今史朗は1937年頃から1977年に亡くなるまで福岡を拠点にして前衛の立場から創作活動を展開した。1970年の大阪万国博ではサントリー館のために委嘱を受けて電子音楽《生命の水》を作曲しているが、全国的にはほとんど無名のままで今日に至っている。そこで今史朗再評価のための研究をはじめたのである。この研究は作品上演機会の創出を含む、幸いなことに《偏光》の上演機会を、2013年6月21日の福岡銀行本店ホールでの「永野哲 音楽生活40周年記念演奏会—福岡の作曲家達—」において創出することができた。上演のためには楽譜の校訂が不可欠であり、校訂には当然作品分析を伴うことになる。この作品分析が本発表の内容に大きく関わっている。

2. 編成

《偏光》は弦楽合奏とヴィブラフォンという編成のために作曲されている。しかしオリジナルスコアには個々の楽器数（奏者数）の特定に関する指示は書かれていない。ヴァイオリンが4段、ヴィオラが2段、チェロが2段、コントラバスが2段、ヴィブラフォンが1段で書かれている。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの各段に

<sup>2</sup> 音群的音楽とは音響テクスチュア（複数の楽器や音を作り出すその瞬間の響きの全体の表象）の変遷、音群の状態変化を音楽内容とする音楽。

は divisi (分奏) の指示が書かれている部分があるので、ヴァイオリンは 8 人、ヴィオラとチェロはそれぞれに 4 人の奏者が少なくとも必要であることがわかる。

今回の校訂楽譜ではこのことを踏まえて、ヴァイオリンを 8 段、ヴィオラを 4 段、チェロを 4 段、コントラバスを 2 段、ヴィブラフォンを 1 段で書いた。2013 年 6 月 21 日の福岡での演奏会では各段 1 名ずつの 18 名の弦楽奏者と 1 名のヴィブラフォン奏者の計 19 名によって演奏される。

ヴィブラフォンを除いた弦楽合奏の同質的な音色は、クラスター<sup>3</sup>を構成するのに適している。多くの場合、クラスターは楽器群ごとに単位を構成し、その集合で全体的なクラスターを構成する。《偏光》では、時に全体クラスターの構成に参画しない楽器や楽器群があり、それは構造の「彩り」として認識されることになる。

### 3. 記譜法

すでに述べたように、《偏光》のスコアは近代五線記譜法の範囲内で記譜されている。拍子は四分の四拍子である。今史朗の以前の音群的音楽に見られたようなペンデレッキ風のクラスター記譜法によるスコアとは異なっている。

ペンデレッキ風のクラスターは二つの音高間を均質な音程間隔で音高を配置し、それらを同時に鳴らすものである。多くの場合は半音間隔で配置するが、弦楽器などの場合は四分音間隔で配置することもある。四分音間隔によるクラスター和音はキーンとした響きで、ひじょうに硬質な印象を与える。そのクラスター記譜法は、最高音と最低音の間を黒く塗りつぶし、それを水平方向に棒状に延ばして書き、持続時間を秒数で提示するものである。そこには拍節は存在せず、様々な内容のクラスターの時間軸状での組み合わせによって音楽が構成される。

近代五線記譜法の中での拍節に基づいて音楽が書かれることによって、単位の明確な楽節反復・楽句反復・音型反復が音楽内容の主要要素のひとつとなっているのである。

### 4. クラスター構造

この曲におけるクラスターの音高構造は 3 種類に大きく分類できる。クラスターを構成する最低音と最高音の間を全音間隔で均等に埋めた「全音クラスター」、半音間隔で均等に埋めた「半音クラスター」、全音クラスターの集合の結果として半音の積み重ねになる「結果半

音クラスター」の 3 種類。なお、全音クラスターと半音クラスターには最低音と最高音の間を均等間隔に埋めていないクラスターがある。それらのクラスターを「全音クラスター (非均等)」と「半音クラスター (非均等)」と区別してとらえることもできる。

クラスターの時間構造は、「持続音」として演奏されるものがもっとも多い。その際、音量一定、音量漸次増大、音量漸次減衰の 3 種の方向性がある。

クラスターの音高構造を時間軸上の音列に移し替え、それを非周期的リズムで反復し続けたものを「内部運動を伴う持続音」として認識することができる (譜例 1)。この方向性にも音量一定、音量漸次増大、音量漸次縮小の 3 種がある。音高の異なる短い持続音が複数継起すると「旋律」として感じることができる。旋律は楽節反復、楽句反復、音型反復のいずれかの形態で出現する<sup>4</sup>。



図 1. 譜例 1：リピート記号の中の音を非周期リズムで反復し続ける

### 5. 構成

オリジナルスコアには 3 カ所にアルファベット記号が練習番号のように記されている。しかしそれらは練習番号としては番号間に含まれる小節数が多すぎて実用的ではない。そのため校訂に当たっては新たに練習番号をつけることになった。

練習番号をつける箇所は、General Pause (G.P.=全楽器の休止) があつたり、音量に大きな差があつたり、音域が急に変化したり、楽器の数が急に変化したりするところ、すなわち音楽内容に大きな変化があるところである。このようにして練習番号をつけると、それは一つの音楽的まとまりを表す記号となる。すなわち音楽区分としての認識を保証するものとなる。

以下、音楽区分ごとに音楽内容を描写する。アルファベットは練習番号を表し、数字は小節数を表す。

冒頭 (1-9)：クラスターは全音クラスターの集合による結果半音クラスターである。アクセントとしての低音弦のグリッサンド (譜例 2) に導かれて、高音域における全音クラスター持続音がアクセントの余韻として鳴る。この持続音の裏で低音弦のピチカートや打楽器の効果音が音楽内容に彩りを添える。

A(10-17)：ヴィブラフォンのアクセント的音型で始まる。各楽器群は全音クラスター (非均等) を構成し、

<sup>3</sup> クラスター (cluster) は、英語で「房」「集団」「群れ」を意味し、音群的音楽においては構成単位のひとつとしてとらえられることができる複数の音の群れのことである。

<sup>4</sup> 便宜上、3 小節以上の単位を楽節、2 小節の単位を楽句、2 小節以下の単位を音型としている。

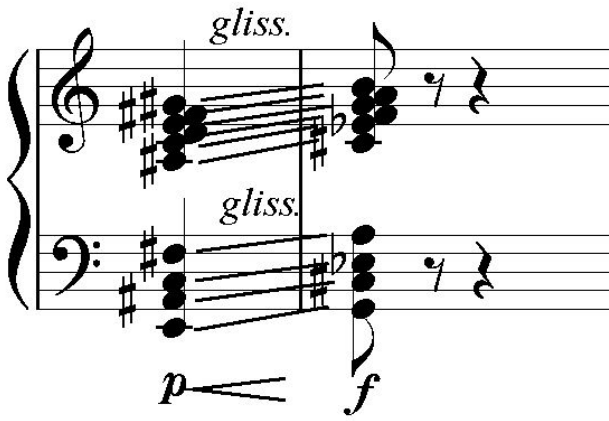


図 2. 譜例 2

徐々に楽器群が増えていき、結果半音クラスターを形成する。この持続音の裏で低音弦のピチカートや打楽器的效果音、そしてヴィブラフォンが音楽内容に彩りを添える。クラスターの方向性は音量漸次増大で、その到達点で G.P. が挿入され、明瞭に段落を形成する。

B(18-27)：非同期で開始される半音クラスター（非均等）持続音とチェロの旋律断片の組み合わせの裏で、コントラバスのピチカートやヴィブラフォンが音楽内容に彩りを添える。音楽内容は楽節反復（5小節×2）から成る。反復の際には長2度上に移置される。

C(28-35)：区分 C は区分 B の変奏である。違いは楽節が4小節に短縮され、また楽節の最初にヴァイオリンの強烈なピチカート音型が鳴らされることであり、コントラバスが省かれていることである。クラスターの方向性は音量漸次減衰で、その到達点が ppp の再弱音である。

D(36-47)：ヴィオラの ff のトレモロによる半音クラスター持続音で始まることで、前の区分とは大きな段差をつくる。トレモロの半音クラスター持続音はヴァイオリンに移り、そこにまたヴィオラが加わるというように推移していく。その裏ではチェロの半音クラスターの半音階下行音型や、ピチカート及び打楽器的效果音が音楽内容に彩りを添える。

E(48-55)：トレモロの半音クラスター持続音は前の区分から連続して鳴る。そこにチェロとヴィブラフォンの全音クラスター（ただし、わずか2音）による音型反復（2小節×4回）が彩りを添える（譜例3）。クラスターの方向性は音量漸次減衰で、到達点 ppp で収束する。

F(56-62)：トレモロによる全楽器の半音クラスター持続音が ff で鳴りはじめ、前の区分とは明瞭に段差を形成する。その持続音が鳴り終わると、ヴァイオリンパートのみが残り、そのまま半音階で下行する。

G(63-72)：半音クラスターの持続音が楽器群ごとに重なりあう。5小節で楽節を形成し、その楽節は楽器群と

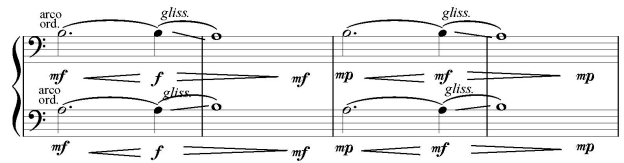


図 3. 譜例 3

音高を変えて反復される。

H(73-81)+I(82-90)：ヴィブラフォンが半音クラスターを「内部運動を伴う持続音」として演奏し続ける。その上にコントラバスを除く楽器群が半音クラスターの楽句反復を演奏し続ける。楽句は拍節に基づく周期的リズムで、反復の効果を高める（譜例4）。クラスターの方向性は音量漸次増大で、その到達点で G.P. が挿入され、明瞭に段落を形成する。



図 4. 譜例 4

J(91-102)：3つの半音クラスター持続で1小節の音型が形成され、それが音型反復となって演奏され続ける。それを背景にしてチェロが4小節の旋律（譜例5）を奏で、それがそのまま楽句として反復される。この作品中、唯一、一般的な意味での「旋律」として明確に認識できる一瞬である。



図 5. 譜例 5

K(103-114)：中低音域で半音クラスター持続の2小節単位の音型を形成し、その音型が4回反復される。それを背景にして中高音域の半音クラスターが鳴り続ける。

L(115-125)：中高音域で半音クラスター持続の1小節単位の音型を形成し、その音型が8回反復される。その背景としてチェロによる半音クラスターが内部運動を伴う持続音として演奏され続ける。音量漸次増大の到達点

で全音音階下行をはじめ。

M(126-133)+N(134-146): ヴァイオリンによる半音クラスターが内部運動を伴う持続音として演奏され続ける。それを背景にして、2拍単位の音型反復(譜例6)が楽器の数を増やしつづ演奏され続ける。音量漸次減衰してG.P.に至り、段落を形成する。

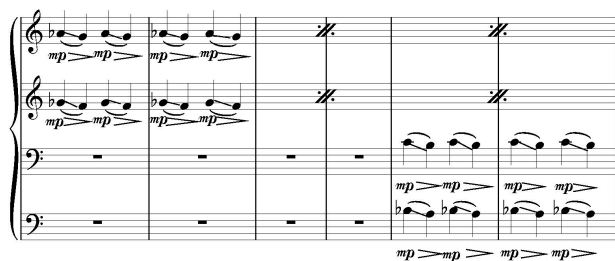


図 6. 譜例 6

O(147-153)+P(154-159):半音クラスターが音型反復として演奏され続ける。初めは低音弦のみでの音型反復であるが、徐々に高音域の方へ楽器を増やしていく。また、反復の際には半音上に移置され続け、反復間隔を短縮し、さらにテンポを上げていき、音量漸次増大で *fff* に到達し、ひとつの音高 (f) に収斂する。

Q(160-166):前の区分で到達した音高を半音上に移置2回移置して音高 (g) に到達する。そうして冒頭のアクセントとしての低音弦のグリッサンド(譜例 3-2)が再現されて終わる。

## 6. まとめ

今史朗の《偏光》はクラスター構造を形成しやすいように同質的な音色による合奏の形態によって作曲されている。そのクラスター構造においては四分音クラスターは用いられていない。その意味で、鉱質的な響きはない。むしろ全音音階クラスターの多用によって幾分柔らかくひびく。

伝統的な近代五線記譜法によって書かれていることで、クラスターは単なる持続ではなく、拍節構造の基づく楽節反復、楽句反復、音型反復の形態で現れる。

音叢という概念は、クラスターの響きの柔らかさと、クラスターが楽節・楽句・音型の形態をとるところから導き出されており、そのことが今史朗の音群的音楽の特徴の一端を示している。

(本研究は、日本学術振興会平成 24~26 年度科学研究補助金基盤 C・課題番号 24520161 の研究助成を得て行われている。)

## 7. 著者プロフィール

### 中村 滋延 (Shigenobu NAKAMURA)

1950 年生まれ。作曲家、メディアアーティスト、音楽評論家、映画研究者。交響曲四曲を含む 100 曲近くのクラシック系現代音楽を作曲。また「音楽系メディアアート」という領域を創成し、映像重視のコンピュータ音楽やサウンド重視の映像アートを多数制作、内外で発表。文筆活動・イベント企画にも積極的に取り組む。現在、九州大学大学院教授(芸術工学研究院コンテンツ・クリエイティブデザイン部門)。2010 年福岡市文化賞受賞